

雙殉行 (竹添井井)

戦雲 城を圧して 城壊れんと欲す

腹背 敵を受けて 我が軍 敗る

連隊旗は臣が掌る所

賊の為に奪わる 臣が罪 大なり

旅順の 巨砲 千雷 轟く

骨は碎け 肉は飛び 血雨 腥し

二万の 子弟 吾が 為に 死す

吾何の面目 あつて 父兄に見えん

青山の 馳道 朱闕に 連なり

万国の 衣冠 儼として 列を成す

靈輿 肅々 牛歩 遅く

金輪 徐に 軛つて 声 咽ぶが 如し

弔砲 一響 臣が 事 終る

腹を刺し 喉を絶つ 何ぞ従容たる

傍に 峨眉の端座して 伏す有り

白刃 三たび刺して 緘手 紅なり

遺書 固く 封じて 墨痕 湿う

躬を責め 世を誡む 情尤も 急なり

言々 都て 熱腸より 迸ばしる

鬼は哭し 神恫み 天も 亦泣く

嗚呼 身を以つて 君に殉ず 臣節堅し

生を 捨てて 夫に従う 婦道全し

忠魂 貞霊 長えに 散ぜず

千秋 万古 桃山に 侍す

◎語釈 ※雙 対。乃木將軍夫妻のこと。※殉 明治天皇の死を追つて死ぬ。※戦雲 西南戦争。※腹背 腹と背。前と後。※連隊旗 天皇から連隊長に親授した。軍旗。※臣所掌 自分が取り扱う事になっている。※旅順 日露戦争の旅順攻囲戦。※巨砲 大きな大砲。おおづつ。※雷轟 雷鳴のように轟く。※二萬 二万名にのぼる兵。※青山馳道 青山通りの天皇の通られる道。※朱闕 朱く塗られた城門。※衣冠 高貴な人。※靈輿 此し。※肅肅 つつしむ。かしこまる。※牛歩 牛のように歩みが遅いこと。※金輪 黄金の飾りをつけた車輪。※弔砲 弔意を表わすために儀仗隊の砲兵により発射される空砲。※従容 危急の場合にも、慌てて騒いだり焦つたりしないさま。※峨眉 静子夫人のこと。※端坐 坐つたまま。※墨痕 筆で書かれたあとと湿つていた。※誠世 世の中の状態を戒める思い。※言 言 どの言葉も全て。※熱腸 煮えかえるような心中。※殉君 主君に殉じる。※婦道全 夫に従つた夫人は女の守るべき道を全うした。※忠魂 忠義。※桃山 桃山御陵 (明治天皇の御陵)
◎通釈 西南戦争の暗雲が垂れ籠めて城塞が崩れそうな勢いであつた。敵の攻撃を受け、我が軍は敗れた。連隊旗は、私 (乃木) が取り扱う事になつていたが、敵に軍旗を奪われた罪は重い。
◎日露戦争勃発。日露戦争の旅順戦では、大砲が雷鳴のように轟き、骨は碎け、肉は飛び、血の雨が降り、それは腥いものであつた。二万に上る兵は、私の命令の為に死す。戦死した兵士の父兄に対して、どんな顔を合わせられようか。
◎明治天皇死去。青山通りの天皇の通られる道は、朱い城門が続き、外国からの参列者が、整列していた。天皇の柩を乗せた輿は、牛歩の様に進んだ。黄金の飾りの車輪は、きしみ、咽ぶかのような音であつた。弔砲が響き、陛下の臣下として仕えることは終つた。
◎乃木將軍殉職。乃木は刀を腹に刺し喉を断ち切つた。傍らに静子夫人が坐つたまま伏している。白刃を三たび刺し手は紅に染まつていた。遺書は封がされていたが、筆で書かれた跡は湿つていた。我が身を責めて、世の中を戒める思いは、他に比べ敵しいものがあつた。どの言葉も全て、煮えかえるような心中から流れ出たもので、声をあげて啼き、神はいたみ、天もまた涙を流していた。身を以て主君に殉じたのは臣下としての節義のかたいから。生を捨てて、夫に従つた静子夫人は、女の守るべき道を全うした。忠義と、貞節な靈魂は、散り失せることはなく。永遠に桃山御陵でお仕えます。